

## Philosophy - 1

26期生の諸君、お久しぶり。高校3年生の気分はいかがでしょう。時間があれば、昔はやった『高校3年生』という歌でも聞いてください。

さて、次の土曜日に待ちに待った（誰も待っていないかも知れませんが）最初の授業があります。高次の三学期に始めた哲学史の続きをします。「受験勉強で忙しいのに」と言う人もあるかも知れませんが、確かに哲学や宗教の授業は大学の入学試験には直接役には立たないかも知れませんが、人生の道でいろんな問題にぶつかる時に役に立つはずなので、少し我慢をお願いします。

三学期に授業をしたとき、みんなが興味をもって聞いてくれたのはとてもうれしかったです。でもさぞ難しかったことだろうと思います。哲学の授業が難しいのは、先生の教え方が悪いからだけでなく、内容がみんなにとっては初めて聞くことが多いからでもあります。哲学のテーマ、たとえば「世界は変化しているが、その中に変化しないものはあるのか」とか「外の世界のを知ることができるのか」とか「そもそも知るとはどういうことか」などという問題を中学校で習うことはありませんし、たまたもしこのような問題を始終聞いていたら、みんなの頭は爆発して焦げてしまい、若ハゲに悩む羽目に陥るかも知れませんが、だから、ほどほどにしないといけません、時々はこのことを話したり考えたりするとだんだん哲学が何かわかってきて、なぜこんなことを勉強するのかも理解できると思います。

三学期は、哲学という学問がどのように古代ギリシアで始まり、中世ヨーロッパに引き継がれたかをざっと見ました。その授業で、大切なことは「誰が何を言ったか」ではなく、いったいあの頭のよい人々が何を問題にしたかをざっと知ることです。たとえば、タレスという人が「万物の根源は水じゃ」と言ったことに関して、その事実を覚えるよりも、彼がどういう意味でそういう発言をしたかを理解する方がずっと大切なのです。そこで、再び哲学の授業を始める前に、三学期に習ったことの復習を兼ねて、そこで出てきた哲学の重要な問題のいくつかをもう一度説明しておきたいと思います。

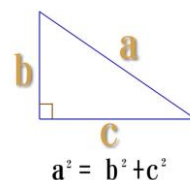


一つは、古代ギリシアの人々も、中世西洋の人々も、世界を素直な目で見える人が多かったと言うことです。つまり、まずあるがままの世界を見てから、その見える世界を超えた原理や原因を探そうとしたということです。この態度の裏には「人間は普通に外の世界を認識する（簡単に言えば知る）ことができる」という信念があるのです。「そんな常識やんか」と思うでしょうが、近代（だいたい16世紀以降）になると、「外の世界を知ることができるかどうか、まずそれを吟味（簡単に言うと、「調べる」）しないとイケない」と主張する人たちが出てきて、結局「人間は外の世界を知ることにはできない」と結論されてしまうのです。

この常識人の考えを上手に説明した一人がアリストテレスです。彼は「人間はまず感覚によって外界（外の世界）を難しく言うところなる）を知るが、感覚は普通は間違わない」と断言しました。ここで「普通は」と言っている点に注意してください。これは「感覚も時々間違ふことがある」というのと同じです。たとえば、視覚（「目」を難しく言うところなる）には錯覚ということがあり、耳にも「空耳」てなこともある。味覚も病気で熱があるときには美味し物もまずく感じるし、触覚はドライアイスに触れると「熱チツ」と感じる。でも、しかし、とはいえ、これらの感覚は正常なら正しく外界を感知します。でないと、外の世界は私が見ている

通りかどうかわからないということになります。地面が目の前に見えるけど、ひょっとしたらこの地面は幻で深い穴があるかもしれないなら、怖くて一步も踏み出せない、そうするとまともな生活はできないでしょう。

このアリストテレスは「真理」を「あるものをあると言い、ないものをないと言うこと」と定義しました。これを聞くと、「そんなん、あたり前やんか」と笑うかも知れません。しかし、哲学というのは「あたり前のことを難しく言う」という学問でもあります。ただ、「あたり前田のクラッカー」と思うことも、そうあたり前ではないこともあるのです。たとえば、このアリストテレスの真理の定義は、デカルトには間違っていると思われたのです。彼は「感覚が時々間違ふことがあるなら、それは信じたらあかん」と考えます。ではどうしたらいいのか。デカルトは、「数学や幾何を見てみる。たとえば、三平方の定理は、別に現実の世界を見んでも、つまり感覚を使わなくても、頭の中で直角三角形を描いて、『対辺の二乗は、他の二辺の二乗の和と等しい』って証明できるやろ。これと同じで、頭の中できっちり説明できることが真理なんや」と言います。アリストテレスは「汝が白いと我々が信じるが故に、汝がそうであるのではなく、汝が白いから、そう主張する我々は真理を語るののである」と言うのですが、デカルトなら「私が、汝は白いと考えて、それがはっきりしていたら、それが真理なんや」となります。



みんなはどちらが正しいと思いますか。このデカルトの考えは、あとでカントやヘーゲルという有名な西洋近代の思想家たちに引き継がれます。ヘーゲルは「この世界は頭で考えた通りにある」と言います。その結果、常識で考えると、あるいは厳密に調査をしていくと、とてもじゃないが信じられないような思想が「これは偉い先生が言いはったことや」ということでまかり通り、その考えが20世紀に人類史上未曾有の大惨事（二つの世界大戦、ソ連や中国などの共産主義国家やファシズム国家の恐怖政治）を生み出したと言えます。

「現実を素直な目で見ると」という態度は、現代では特にインテリ（知識人、つまり思想の世界をリードする人たち）の世界では受け入れられないことが多いのです。そうなると、人間とは何か、善悪とは、家族とは、などという日常生活に関わる問題についても首をかしげるような考えがまかり通るのです。それに対して「そんなん常識外れや」と抗議しても、「黙らっしゃい。これは〇〇という偉い有名な学者はんが言わはったことや」と有無を言わさぬ反論をされてシュンとなるということも珍しくないのです。

私はみんなが社会に出たとき、自分の常識的な判断に自信を持てるようになって欲しいと思います。そこで少ない時間ですが、哲学のエッセンスを教えておきたいのです。また哲学的な重要な問題についてのキリスト教の解答も付け加えたいです。名だたる哲学者が格闘した難問にキリスト教はどのような答えを提示したか、これもみんなに知っていて欲しいことなのです。ともかく、私はそういう気持ちで授業をしますので、しばし受験のことは忘れ、積極的に参加してください。

【追伸】授業は少ししかできませんので、その不足分を補うためにせっせとこういう文を書こうと思っています。それで、この通信は捨てずに大切にファイルして、大学生か社会人になったとき、もう一度読んでください。